

南方（その他）

「国民皆兵」の時代に参加して

岐阜県 保木 松右衛門

一 徴兵検査

昭和十六年五月、古川小学校講堂において一町三村の適齢期のものゝ徴兵の義務として検査に参加しました。私も二十一歳で参加しました。検査の結果、体重が少ないためか第二乙種合格第一補充兵役と発表されました。そのころは日本においては大東亜戦争が勃発し、村内の此方彼方では「赤紙動員が来た」と各駅頭には兵隊見送りが続いておりました。私も召集令状の来ることを待ちました。

二 満州勤労報国隊員に参加

昭和十七年四月一日、岐阜県農業協同組合連合会主催満州勤労報国隊岐阜県隊員として参加することとなり、大勢の見送りを受け国府駅より出発、春里修練道場において一週間予備訓練を受けました。そのころは桜花爛漫と咲き香る季節で、祖国日本を後にし敦賀港より出発しました。かの有名な玄界灘の荒波「白馬が飛ぶ」とかいうとても激しい荒波の中に打ち出され、此方コロコロ彼方コロコロの航海で、船内全員ほとんどの者は船酔いで生きた心地もなく、毛布一枚にくるまっておりました。

そのうちに朝鮮の清津を経て羅津に上陸し、満鉄列車に乗車しました。そのころは船酔いも少しずつ快方に向かいましたが、車中には中国人が乗車して二

ンニク臭いこと。私たちには初めての体験で何か嫌な感じがしました。

また、お互いの話し合っている言葉も判らず、私たちはただ黙然とするばかりでした。しばらく進行すると日本兵が武装して列車に乗車してきました。私たちは緊張の中にも安心することができました。

現地の北安省白家農場は、ソ満国境へ一〇里ぐらいの距離といわれました。予定地に到着すると六日間の長旅で大変疲れていましたが、予定地の白家農場に着すると当所には粗末なバラック建ての宿舎が私ら隊員を迎えてくれました。四月中旬とはいうものの、寒さは激しく、地下五〇センチぐらいは硬く凍り、見渡す限りの大広原には山も川も見えず、道路も別になく馬車(マーチョ)などでどこを走っても落ち込むようなことも無く、郷里の日本には比較にならない光景でした。

私ら隊員は寒さや空腹と闘いながら、暖かい日の来るのを待ちながら生活しました。いよいよ五月に入ると暖かい日も続き、土中の氷も解け始めました。

「どこまで続くか泥寧の」の大広原、畑地の距離二キロもあるとか！ 雑草を長柄鎌で刈りとり、焼き払いは、後は満鋤で打ち起こし馬鈴薯の種芋を植え、無金肥でもスクスクと育ち、あぜ道の雑草は鎌で刈りとり、以上の作業を続行し、八月下旬にはとても立派な馬鈴薯を収穫することができました。大広原の畑には山と積まれた芋の山がところどころに並び、まことに見事な光景でした。

九月上旬帰還となり、隊員一同は心を弾ませながら帰還準備をしました。帰路は新京、ハルビン、奉天、旅順等を巡回し、釜山経由で帰還しました。渡満当時とは格段の違いで数多い苦勞と経験を身につけ大変楽しい旅行ができました。

三 陸軍軍属勤務

私は昭和十七年十二月三十日付で各務原陸軍航空支隊軍属工員として志願し入隊しました。飛行機科プロペラ班に所属し、八月勤務中の八月十日、赤紙召集令状が自宅に参り、早速私のもとにも通知がありました。それには「昭和十八年九月十二日午前八時までに呉海

兵団入団の為出頭」とあり、その旨を航空隊廠長大川中佐に申告いたしました。廠長より海兵団入団前まで準備休養の許可が下り自宅に帰郷しました。

四 海兵団入団

昭和十八年九月十八日早朝、いよいよ出征の時となり、家族、部落、村内の皆様大勢の方々に最後のお別れを告げ歓呼の声に送られながら国府駅を出発しました。その折には兄も岐阜駅まで送りにきて、私に対して心からの励ましの言葉をくれ、今なお頭に残っています。翌朝薄暗いころ呉駅に到着すると、駅頭には海兵団から古参兵二、三人が出迎えてくださいました。私は心身共に張り切って入門しました。規律正しい中に体躯検査に合格。入団申請書には「一番信頼する人を書け」とあり、私は国府村出身者の都竹兵曹長と書きました。

三種軍装の軍服等数多い品を衣納袋にぎっしりと貸与され、これら一品一品に名前を書くことは大変苦労しました。一週間は呉海兵団内の教練場で陸戦訓練を受けました。その折、水兵教班二十人に対し徳島航空

隊に転勤の命令が出され、私らは連絡船に乗船し、当該航空隊に入隊、第十教班に編入されました。

いよいよ新兵教育が始まり、毎朝六時の「起床五分前」の号令と同時に一齐に吊り床より飛び降り、事業服に着替え、吊り床を固くたたみ納め、舎外に整列し点呼を受け、教班長の指示により航空隊滑走路の周りを駆け回りました。一朝目には一周回り、二朝目に二周回り、二十朝目には二十周二十キロ（約五里）、朝食前に大変な猛訓練でした。また手旗信号、カッタ訓練などの新兵教育期間は三カ月で無事修了、海軍一等水兵に進級することができました。

次は海軍自動車学校講習生に進学、教育期間二カ月で卒業、卒業後一カ月で上等機関兵に進級しました。

昭和十九年二月一日付呉海兵団に再転勤、機関科に勤務、二月二十日南方派遣として輸送船「さぬき丸」に乗船、四十日間の船内生活でした。船内は水不足で、毎朝洗面には用水割り当てで食器一杯のみで、洗濯や入浴はできず、体はシラミ、インキンタムシなどに冒されて全く情けないありさまでした。四十日目にジャワ

島スラバヤに上陸、その後バリクパパンに十日滞在、メラック第二十二特別根拠地サマリンドに駐屯しました。勤務中に米機一三〇機の大編隊の攻撃を受け、わが軍は百人ぐらいの部隊なので、貧弱な兵器では応戦することもできず、ただジャングルや木の下に身を隠すことで精いっぱいでした。幸いにも兵隊一人の犠牲者も無く再び集合することができましたが、住居の建物および滑走路などは爆破され居住することもできなくなりました。そのような時に幸いにも旧オランダ軍使用の赤十字マークの建物が見つかり、一時そこを借り戦闘に従事しました。その後二、三日後には必ず敵機の来襲があり、わが身に危機が迫って参りました。昭和二十年八月二十日、第二十二特別根拠地隊司令官鎌田中将閣下より終戦の報告があり、武装解除のため米、英、連合軍側より出頭するためマーカーカム河対岸まで迎えに出るよう指示され、私は阿部中尉隊長と共に豊田貨物車を運転し、対岸へ迎えに向きました。対岸には米、英、濠洲各軍の旗を翻した船が並んで待っていました。

阿部隊長と私はただ緊張するのみでした。武装解除は武器および弾薬すべての菊のご紋章印は削り取り、これら全部の兵器を差し出し、その他に私物の貴重品まで没収されました。これで一応終わり、その後は連合軍の指示に従って行動しました。使役等に呼び出されたり旧日本兵全員に整列が指示され、首実験を三回もされました。また現地人からは馬鹿にされ、石などを投げられることもありました。

昭和二十一年二月、カラモクへ旧日本兵全員が集結となりました。当所は周囲にバリケードを張り巡らし、四方に機関銃を備えつけ、見るからに険しい構えで私らを迎えていました。場内では十一人宛に分けて天幕生活で、食事は連合軍より割り当てにて与えられてはいましたが、監視兵などに上前をとられて、少量の食料で毎日を送りました。そのうちに仲間の者の中には栄養失調のため脚気、マラリア、アメーバ赤痢など悪病に冒され死亡する者が出て大変な日々でした。

昭和二十一年六月三日、日本人帰還の知らせがあり、

私達は心を弾ませ米軍の貨物船に乗船しました。台湾沖付近海で、乗船者のうち二人がマラリアのため死亡し、海中に葬るようなこともありましたが。そのころ私も発熱し、苦しい中にも「せめて日本の土を踏んでから死にたい」と心の中で念願していましたが、幸いに命永らえ懐かしの故郷日本の名古屋港に上陸することができたことは神仏のお陰と深く感謝いたします。

岐阜県引揚者世話係を経て飛騨地へと帰還して参りました。昭和二十一年六月六日、命を国家に捧げ皆様に最後の別れを告げて出征した私、恥ずかしながら再度国府村に帰郷しました。まず役場を訪れ、村長梶谷吉之助氏に復員の挨拶をしました。村長さんからは私の帰還を心温まるお言葉で迎えて下さいました。

また、兄虎雄の戦死の旨を聞かされ、初耳でただ茫然とするのみでした。私の出征の際、兄はわざわざ岐阜駅までも送りに来て、私への励ましの言葉で別れたのが永遠の別れとなりました。二カ月後に兄は二回目の召集を受け、中部四部隊に出征し、サイパン島において玉碎し名誉の戦死を遂げました。今は軍神として

靖国神社に祀られている兄に対し、ただ瞑目合掌するのみです。

終戦後からはや五十余年、走馬灯の回転のように時は過ぎ去り、平和な日本の今日このごろ、私はお陰様にて健康に恵まれ、一日一日を楽しく生活のできることに對して感謝しております。

ジャングルの彷徨

京都府 矢野 美三雄

昭和二十(一九四五)年五月七日、日独伊の枢軸国の有力な一翼のドイツ軍が連合国軍に降伏した。ドイツはフランスと陸地続きの一大強国で優秀なゲルマン民族であるが、有史以来幾度となく国境の紛争を繰り返し、第一次世界大戦においてもセルビアの一青年のはなった一弾が大战の引き金となり日本と敵対した。その時日本は世界に名を挙げ、ドイツ領有の島々も日本の委任統治領となった。私らの幼いころは小学校読